朝日新聞
Asahi Shimbun

June 17, 2021

# 意欲的なアート作品が並ぶNYトライベッカのギャラリー館の建築にも注目

ARTS & CULTURE 2021.06.17 | 3 0

伊藤知宏

**伊藤知宏** 現代美術家

1980年生まれ。東京・阿佐ケ谷育ちの現代美術家。日本政府から助成金を得てニューヨークへ渡米。武 ...

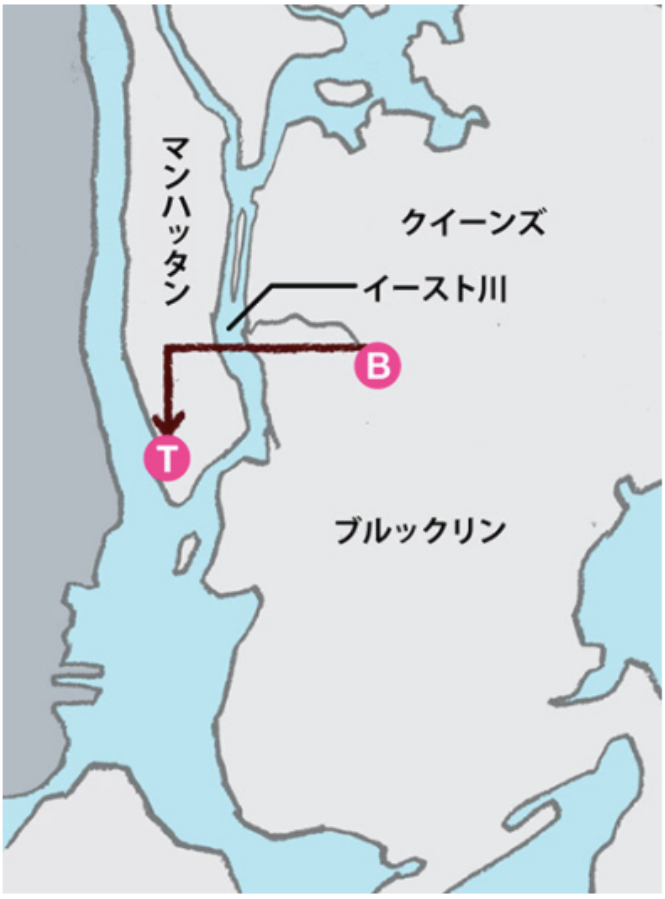
現代美術家・伊藤知宏さんがアーティスト目線でニューヨーク（以下、NY）の街をリポートする連載「On the New York City!」。コロナパンデミックの影響でしばらくお休みしていましたが、NY州でワクチン接種が進み、徐々に日常が戻りつつあることを受け、伊藤さんが再びアートの現場を巡ってきてくれました。

マンハッタン南部の地区「トライベッカ」のアート事情について、二回にわたってお届けします。

## 郷愁感をいざなうNYのビル群

トライベッカは、NY市マンハッタンのダウンタウンの西側にある地域で、この名前はTriangle Below Canal Street（=キャナルストリートの下側の三角地帯）の頭字をつなげたものだ（実際には台形に近い）。

1970年代にソーホーの地価が高騰すると、駆け出しの芸術家たちがトライベッカに集まってきた。元商業スペースの空室が多くあるこの地に、安くて広い制作場所を求めてきたのだ。しかし1980年代からは、工業地域から大型の住宅地区に変身した。今では地価が高騰し、芸術家らはブルックリンやクイーンズ、ブロンクスに居をかまえることが多い。




僕が住むブルックリンのブッシュウィック地区（上図「B」）からは、地下鉄のLトレインで「14 street – 6AV」駅へ向かい、地下鉄の1トレインに乗り換えた後、南下して「フランクリン」駅（同「T」）で降りる。この駅はトライベッカ地区の中心に位置している

この地域にはギャラリーを始め、映画制作会社の事務所などもある。コロナウイルスの影響で空き物件が増えたものの、NY州と住民の感染症対策とワクチン接種により、徐々にこのエリアにあるカフェやギャラリー、ホテルにも観光客が見られるようになってきた。以前のように戻ったとはとても言えないが、街が少しずつ活気を取り戻し始めているのも実感できる。

トライベッカや隣のソーホー地区などには、キャスト・アイアン建築（＊）群が多く見られる。美しいNYを舞台にしたマーティン・スコセッシ監督の「アフター・アワーズ」（1985）などでもおなじみだ。これらの建築物は、1860年ごろから1900年ごろまでに多く建てられた。

今も残存するこのビル群の近くを歩くだけで、昔のNYにタイムスリップしたような気分になれる。NYが舞台の映画をたくさん見て育った僕にはたまらない場所だ。

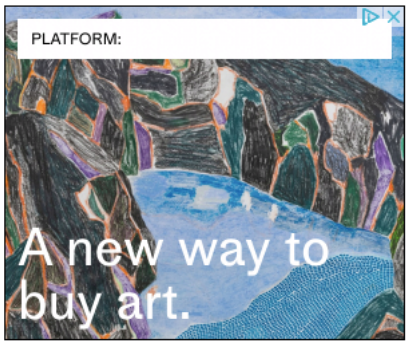
**＊比較的安価で様々な形状を作りやすい鋳鉄（ちゅうてつ）を主に用いる建築法。大きな窓と装飾された柱などがデザイン的な特徴。19世紀に英国より伝わる**

写真左：トライベッカ地区の東北の地域。NYの天井の高いロフトのある建物がひしめく
写真右：トライベッカの中心から南側に下ると超高層ビル「56LEONARD」（スイスの建築家ユニット、Herzog & de Meuron設計）が唐突にそびえたっている

この地域の北東エリアは、ギャラリーが多く、すべて見て回ろうとしても、１日ではとても見切れない。

ギャラリーのほとんどは、キャスト・アイアン構造の建築の中にある。建物の階を問わず、天井が高く、スペースの中心には古代ギリシャ様式のデザインの柱が多く見られる。それらをそのまま内装として使用しているギャラリーが多い。

これらの建築様式から垣間見えるのは、NYが欧州などから来た移民やその子孫らの作った街で、彼らが遠く離れた自分たちの生まれ故郷やルーツを懐かしんだり大切にしていたりすることだ。そんな彼らの思いに共鳴して、なんだかロマンティックでセンチメンタルに感じてしまう。NYの移民文化を通してこのような感覚を覚えるのは、決して僕だけではないだろう。

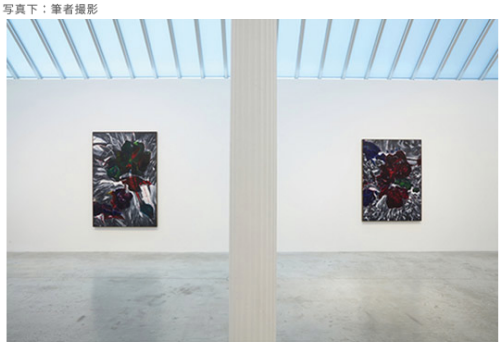



今回僕が訪れたギャラリーを二つ紹介したい。まずはウォーカーストリートとチャーチストリートにある「Bortolami Gallery」。

１階ではアメリカの抽象画家、デボラ・レミントンさん（2010年没）の個展が行われていた。彼女の1960年代から00年代までの作品が並んでいるが、驚くことに40年以上の間、作品のスタイルが全くと言っていいほど変わっていない。「継続は力なり」と無言で訴えかけてくるのが、この展覧会のすごさだ。

２階ではグループ展「Transmutations」が開かれていた。一般的なキャスト・アイアン構造の住宅スペースの内装をそのまま使用した展示方法で、鑑賞者に自分の家に作品を飾ったらどう見えるかを想像させる。右の奥に見える木の引き出しはキッチンだ（２つ目の写真の下段を参照）。

Bortolami Galleryの2階部分の写真
写真上：Transmutations, installation view, The Upstairs, Bortolami Gallery, New York, 2021. Image courtesy the artists and Bortolami Gallery, New York. Photograph by Kristian Laudrup. 床置きの作品がJules GimbroneさんのTraps and Transmutations 3
写真下：筆者撮影



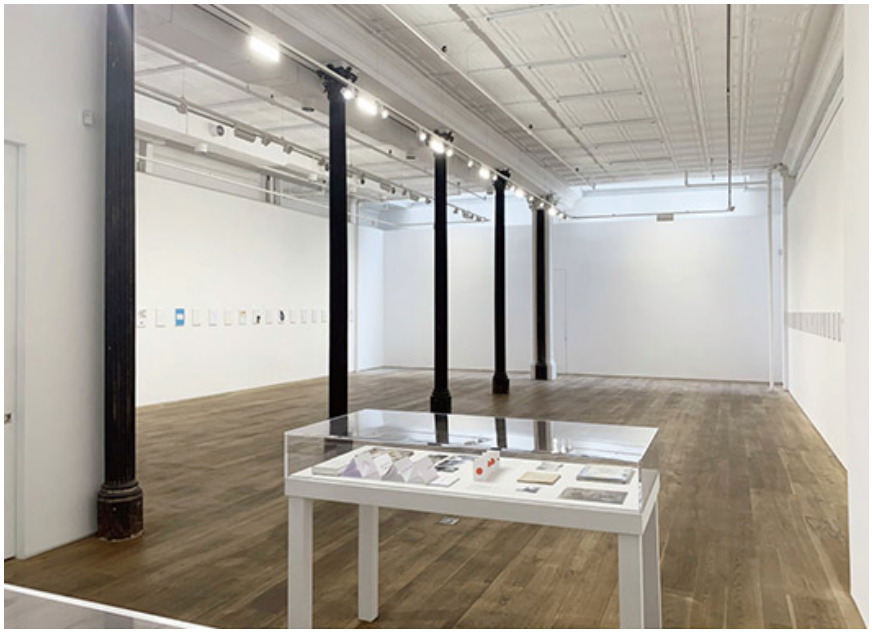
Bortolami Galleryの1階部分の写真
写真上：筆者撮影
写真下：Deborah Remington: Five Decades, installation view, Bortolami Gallery, New York, 2021. Image courtesy Bortolami, New York. Photograph by Kristian Laudrup.

もう一つのギャラリーは「Ortuzar Projects」。イタリア人アーティスト、リサ・ポンティさんによる「LISA PONTI: DRAWINGS, 1993-2018」と題した展覧会が大きなスペースで開かれていた。

彼女の作品は、線を使った絵やコラージュが主だ。特徴は、僕が過去に見たどの作品よりもシンプルな絵（またはコラージュ）の構造にある。これだけシンプルでいながら美術作品として成り立っているのがすごい。非常に高いデザイン力のなせる業だろう。

この展覧会は展示方法もシンプルで余白部分も多い。そこに美しさを感じると同時に、このエリアの土地の高さからとてもぜいたくな展示方法であるとも感じた。

写真左：Lisa Ponti, Untitled, n.d.; Watercolor on paper, 11 3/4 x 8 1/4 inches (29.7 x 21 cm)
写真右：Lisa Ponti, Untitled, 2008; Collage and sticker on paper, 11 3/4 x 8 1/4 inches (29.7 x 21 cm)



Ortuzar Projectsのギャラリースペース

## 美術館では味わえないギャラリーの魅力

政府がワクチン接種を推進した効果で、NYの街も少しずつ以前の状態に戻りつつある。昨年の夏から今年の３月ごろまで、ギャラリー利用はオンライン経由で予約、または入り口での個人情報の入力が必須であったが、今ではほぼ必要なくなった。入場料などは基本的には無料だ。

ほとんどのギャラリーには無料のマップが置かれ、最新のギャラリー・スペースや展覧会の情報がチェックできる

トライベッカの各ギャラリーにはそれぞれ個性がある。巨大な絵が１枚だけ展示してあるだけのスペースから、年配作家の新作展、実験的な試みのグループ展まで多岐にわたるが、残念ながら駆け出しの若いアーティストの作品はほとんど見られない。

まだ若手アーティストの僕としては、少しくらいは若手の作品を取り扱い、冒険してもいいのではと思うが、ギャラリー側にも事情があって現実的には難しいのだろう。

> それでも、将来的に美術館などに収蔵されるかもしれない意欲的な作品群が並び、そこから新鮮さやエネルギーを感じられるのが、ギャラリーならではの魅力だ。専門家の僕が見ても、解説を読まないと趣旨がわからない作品も多い。ギャラリーの雰囲気や作品をさらっと見るのも楽しいが、時間が許すならば、作品の解説などを読みながら時間をかけて見ていくことをお薦めしたい。

ちなみに、かつてこの連載でチェルシー地区のギャラリーを取り上げたが、トライベッカやソーホーのギャラリーとチェルシーのそれとの違いは、ギャラリー自体の構造——つまりキャスト・アイアン構造の建築物にも楽しみを見いだせるところにあると思う。

天井の高い古い建物を改装したギャラリーは、自然光の降り注ぐ巨大な部屋に絵が飾ってあるような場所から、家具や本などと作品が同じ場所に陳列してあるものまでいろいろだ。

新型コロナウイルスによる規制も徐々に解除され、ギャラリーのレセプショニストからの「ハロー」というあいさつも、なんだか以前よりもうれしそうな気がして、こちらも少しだけ明るい気分になる。 今の時期、NYは秋と並んで非常に過ごしやすい季節だ。この記事を通して少しでもトライベッカのギャラリー地区の現在の空気を楽しんでいただけたらうれしい。&